



Title	第五章 國民社會の社会構造 30
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	1963-10-09
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/77621">http://hdl.handle.net/2115/77621</a>
Type	manuscript
Note	『鈴木栄太郎著作集7(国民社会学原理ノート)』を出版した際のソースとなった原稿である(同書内での言及による)。
File Information	I037_0130S38.pdf



[Instructions for use](#)

K-6

30

31

**NOTE BOOK**

CONTAINING BEST RULED FOOLSCAP

水五章  
國民社會の社会学

昭和十八年七月十九日

A  
30  
353



意匠登録  
No. 151492



30

東京と都府下は都府下の子配り

(終) 歩編 1 民社の不台播造 (現在新編) 抄録

一 市民の生活の改善を以て社会の進歩を期す

二 市民の生活の改善を以て社会の進歩を期す (余) 綱目録

三 市民の生活の改善を以て社会の進歩を期す

四 市民の生活の改善を以て社会の進歩を期す

五 市民の生活の改善を以て社会の進歩を期す

六 市民の生活の改善を以て社会の進歩を期す

七 市民の生活の改善を以て社会の進歩を期す

八 市民の生活の改善を以て社会の進歩を期す

九 市民の生活の改善を以て社会の進歩を期す

十 市民の生活の改善を以て社会の進歩を期す

十一 市民の生活の改善を以て社会の進歩を期す

十二 市民の生活の改善を以て社会の進歩を期す

十三 市民の生活の改善を以て社会の進歩を期す

一 最上の階級を以て最下の階級の困窮

任 澤 人、  
...  
...  
...

何の制法の制高引  
...  
...

地 是、  
...  
...

山 野、  
...  
...

休 養、  
...  
...

信 仰、  
...  
...

か 満、  
...  
...

の 天、  
...  
...

日 本、  
...  
...

日 本、  
...  
...

日 本、  
...  
...

日 本、  
...  
...

日 本、  
...  
...

日 本、  
...  
...

日 本、  
...  
...

日 本、  
...  
...

日 本、  
...  
...

日 本、  
...  
...

二、昔古...  
...  
...

三、柱...  
...  
...

四、...  
...  
...

五、...  
...  
...

六、...  
...  
...

七、...  
...  
...

八、...  
...  
...

九、...  
...  
...

十、...  
...  
...

十一、...  
...  
...

十二、...  
...  
...

十三、...  
...  
...

十四、...  
...  
...

終 結

一、...  
...  
...

二、...  
...  
...

三、...  
...  
...

四、...  
...  
...

五、...  
...  
...

二、...

...

第一の社会構造の意味とは何に於て

社会の社会構造の理解の方法

日本の社会構造のありは集團の

各種の社会の集團のありは  
構造と機能の綜合的考察

⑩

才一帯の政治情勢と日本口説  
各の政治情勢と日本口説

和公を味する  
和公を味する

の味を味する  
の味を味する

政治情勢  
政治情勢

政治情勢  
政治情勢

政治情勢  
政治情勢

政治情勢  
政治情勢

政治情勢  
政治情勢

政治情勢  
政治情勢

政治情勢  
政治情勢

政治情勢  
政治情勢

政治情勢  
政治情勢

たす集團は何と何とあるかを見出す  
と水女他の集團をどんな具合にリ  
アしてよいかを知らなければならぬ  
ある。

この種の問題は、まず日本の口説  
局に見出す。これは結果は先づ日本の  
口説局のなかには、<sup>あつめ</sup>あつめさか  
りゆの分類による分類しを認む  
て上より文を認む。

金口ルおけと金口ル集團が如何なるもの  
であるかを知りては、容易にその種  
を見出す。然し金口ル内の分類が一  
の種を見出すと、先づ他は皆





# 金口证券集团一览

集团の中心

1. 行政的法人集团
2. 氏子集团
3. 檀位集团
4. 清田集团
5. 近隣集团
6. 経済的集团
7. 特殊出資集团
8. 官設的集团
9. 血縁集团
10. 階級集团

都市のもの

1. 世帯（同居集団）

2. 職残集団

3. 生活抗争集団

4. 地区集団

5. 学校集団

6. 行政集団

7. 学生集団

8. 商店街組合

9. 同業組合

10. 労働組合

日本の民間企業にしろ、公的機関にしろ、以上の組合及び都市のもの以外の

此令集開々々  
何思信な

又一定の地域の上に異なる同位市積の圏の  
として認め得るものとして

農村にわけられる

一、第一生活地区

二、第二生活地区

三、第三生活地区

都市にわけられる

一、第一生活地区

二、第二生活地区

三、第三生活地区

又都市の外周に及ぶ同位の圏の  
として認め得るものとして

一、都市生活圏

二、都市存在圏

三、都市利用圏

四、都市支配圏

五、都市勢力圏

（おけるおにけり都市に）

以上日本の各都市に見られる都市圏の各  
種及び世界各地域圏の各種はこのように  
は、金田元富集圏及び都市地域圏を  
つくってつよものと考へてかま

然るに途の何れはと都市の社会集  
團及び都市圏の中何れの都市集  
又は地域圏が人口密度等の活知の  
核幹を成してその都市の活力の如何

か金に民生の消長を意味して  
そのものであつかうと云ふ事である。そんな  
な精神的集團はあり得ないかも知れ  
ぬ。集團は皆対象の力を以てその時々  
の必要に応じて力を耐え不色々の集團  
のよにまわつてゐるかも知れぬ。然しおと野  
の櫻子の集團は非常に他を制圧する力  
をもつてゐるかも知れぬ。

この回を同率して直ちに是れおと野の  
は口家中に説及に唯物的見方である。  
口民衆の安心の爲には唯物的見方は  
見逃し得ない。又口民衆の  
見逃し得ない。口民衆の制圧  
の力を是れおと野である。この二つは事

西橋の如き同僚を以て口説き交すを運  
んぶいよのてみよを名はけり。  
七月三十一日

農林が都市に支配的でない  
都市が農林に支配的でない

農林と都市とは都市が支配的でない

農林が都市に制圧されるべき都市は論

記不用であらう。今日では農産物の価格

を決定するのは農民自身の方でゆえに

人回りの手段の如くなるはずはない。むしろ

お都市を支配したはずはない。むしろ

農林を搾取する過程の上に都市を

中心としてある人間文化の成長は実現

され得たのではない。

今日の都市の企業と同様の利潤を

農林業企業が得るために

耕作を奨励するは

ある。農家が一戸あり六十軒ありを



に毛

泉

すまじば農家は都市の企業並みの

日本の

生活は如米なる事を見味しては、

何れの時代にも農村は都市に支配されて

来る

都市が支配する。何れかのは都市にあり

何かの機関が農村の人々を支配する

と云ふ事である。この點は都市にありと

相互配の機関は行政的機関と交易

関係の機関である。今日民を支配する

機関は都市に存する。何かの機関が

あると考へて頂よ。

職場か世帯か

都市が繁華を支配する傾向の存す

寺を明かしたるが、都市の中心に在

る都市<sup>生活</sup>の中心には如何なる集團が

支配的であるか。

私の理解するところでは都市<sup>生活の</sup>の中心

支配的なるものは同居集團(世帯)

と職場(機關)の二つである。この<sup>二つの</sup>支配の

上に學校集團、生活施設集團、地区

集團が從属している。

世帯と機關の内では機關が支配的か

あとの生産革命の中心の傾向は

ある。五水は都市の世帯が機關即ち

生活の中心は家族が中心である

移住の中心は家族が中心である

移住の中心は家族が中心である

移住の中心は家族が中心である

移住の中心は家族が中心である

移住の中心は家族が中心である

移住の中心は家族が中心である

移住の中心は家族が中心である

生活の中心は家族が中心である

移住の中心は家族が中心である

移住の中心は家族が中心である

移住の中心は家族が中心である

移住の中心は家族が中心である

移住の中心は家族が中心である

移住の中心は家族が中心である

移住の中心は家族が中心である

移住の中心は家族が中心である

移住の中心は家族が中心である

移住の中心は家族が中心である

移住の中心は家族が中心である

移住の中心は家族が中心である

大戦終止の懸念から大戦終止を目的

大戦終止がより多く今後必要とし

ていよいよ組織が一段の前進して

てそれ天裁運の力を示して来へる

なく大企業は其の強さ小企業は下

清工場制の活動 理知の故に 故に

より研削力をもつ場合が多い 大企業

金控格が大きい よく大企業に寄る

より 金控 格が大きい 有利である

時代と昔に各種の格段は益々大規模

になつて行く傾向が大きい 大都市は

大戦後の需要も 大都市は

大都市にある大戦後の需要も 大都市は

前の中や戦後を支助して 大都市は

である 大都市は 本質が世の中を

はさむ 大都市は 支配する

各種の機同の中下支断的役割を有する機同

口民市場で各種の機同活節即ち生業

活節の争同所得額の割合が決定される

各種の機同即ち生業者内ではその内

の位階に依りて争同所得が各個人に於て

決定される。交易の原則は需要供給の

原則によつて正しく各種機同間に又同種

機同内の相互の機同間に配合されること

が幸か不幸かである。

これと有物生業程人に差違を有する

生業は至るべき人が尊敬する。生業は有

物生業でない者が多い。人は出来て可なり

尊敬される者を人に愛されようとする生業に

つきたーと思ってる。けれど、余りに取得が  
くても困るの、そんなとき、色んな老練して  
人は自分の力と好みと名譽なと見考へ  
おから自分の生業を認めよの、よか、誰か  
自分の希望、満足の生業にあつては  
と、是れ困る。人が自分の生業を  
自分の好みを他へも考へる場合、人を  
又配する生業に、この好みを考へる場  
は、多し、おろす。

同一生業の内、主即位の高く考へ  
は、名を支配す、<sup>後</sup>制を持たせ、此のほ  
り、よから、高い地位に有、小は、何故  
考へ、低い地位のよ、支配する、よか、

の業のけりといふ生業によつて地位の如何  
物に不平等の生業のその上の支配の役割  
と云へるは、いふ生業もある。生業としての  
支配政治は、その地位をよつてある。

か人も支配するが自分自身の業

に片手を預け、生業の役割として云へる

といふ場合には、支配するよりむしろは、恐ら

く、その業の業味を同一の興味を感じさう

と云へる。その水は甚だ快適な興味

あるに相違ない。任務の快楽の大きさを

持つスリルも、征服を業として支配する

は人同様の業といふ快楽の大きさを

の一種であるに相違ない。而も各業

上は万民安泰のための王者の道の一部  
としてこの  
とわすれず公然の任務であるにはあらず  
人はその能力さえあれば一応それを見  
して見たいが事である。  
然し同様に行政の機關が他の諸機關  
に對して多量の條件に支配的であるか。  
物質的建設の進取における工業の進取  
の下部構造の組織的的發展に從  
つて進行し、新政治主義の一種である  
上新構造を有する既成諸形態は  
下部構造の進化に伴つて変化して  
行く。工業の進取を決定するものは  
物質的構造の組織的的發展である。



然し吾人如きはしむれば物理的構造の辨

證北的發展は唯物理的構造の自力によ

り起る進行では存り、唯物理的構造と政治

的力の合作によつて起る進行であると思は

れよ。政治的力の希加なくしては、唯物理的

構造は徒長か死滅の運命に向ふ可なり

下あつた、新證法的進行の幹は政治に在

り、<sup>成り</sup>幹下<sup>の</sup>あり。この政治的幹理に入ると

はよつて人間世界の唯物理的構造が有限

に工業的成長を遂り得るより足らぬ

よ。左がより宇宙より下の口民社会も

是れが工業的成長を遂り、以上唯物理的構造

と政治的幹理は必須の存在である。

口民衆の

自給自足構造を現存私業から口民衆

命で見てみるには口民衆産業に因りよる

転り業作即ち機関をよるにしては考

えよりよるはあまた、特に都市に集まる

いよるはあまた同様の機関もあつた各種の

敗業機関及び工業団体の機関即ち

各種の工場を扱う上りた片はたかぬ

者は商業界に後者は工業界に因りよる

口民衆の機関工業界の機関口民衆の機関

的構造下如実に素朴なものである

次に下中の経済法的発展を達成させるもの

政治的枠組は革命の過程を通じて成る

の節を造つていゝよと定はれる。革命の前  
 において後においても政治的構造が人同社会  
 に常に存してゐるべきを急ぐべきでない。政治  
 的構造は必要なくして政治の秩序を常  
 に維持する。革命は破壊のためではなく建設  
 のためであるから革命によつてほとんどな  
 大きな混乱があつてもそれで政治体制が  
 破壊されることはない。そこが  
 辯論的を否定的な発展の正しい姿  
 である。辯論的発展は是れは政治  
 政治における革命的発展に外ならない。  
 かくつて国民の生活の基礎的の生活に  
 方々しつと構図は、むしろ大げさなものは

口長記念を支配する。新機園は、商  
工業と政治に関係する。機園である。  
新機園都市における機園として次の九種  
をあげたい。

- 一、販賣機園
- 二、技術機園
- 三、行政機園
- 四、治安機園
- 五、交通機園
- 六、通信機園
- 七、教育機園
- 八、信託機園
- 九、娯楽機園

機園

右の内閣工業及政治機園は一、二、三、四、  
五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、  
十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、  
二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、  
三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、  
四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、  
五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、  
六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、  
七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、  
八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、  
九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

此し是よりいえるものは人は伊よく念。  
考へる必要あり

て行けば多水以上のものは存いといふ

考えとす。人は何故に生きついで

かといふ疑問同にも答をなげればなら

ぬのでおれは、それでは免<sub>の園は</sub>ない。

その方には最終の五つの機園<sub>の園は</sub>即ち教

育、宗教、娯楽の三才面についてのも

と実をこんな理解が必要である。

知し「資本の三つの様相の人同然におけ  
る重要性の意義がどうであらうとす、  
唯物的魂解の適否について批判  
かどうであらうとモ、人の生活の基礎  
が物質にあらずと人の社会の安定  
の基礎が政治によつてのみあへれば、その  
下あらずを求めれば、「資本の三つの條  
件は人の社会生活の存続のための基礎  
的條件であつて、これ等は人の社会生  
活にいつとんを魂解を道せし行く場  
合に人同然の存在の條件を確認  
すべしとの爲にも見出さるるの主要な  
いひのつである。これ等の三條件がた

しては人の存在が認められたいと  
云つてゐる。これは国家を以てし  
ては、  
と尤もこれには同意がある。

右の二つは事實としての口説き合

はついてもよいから、  
は口説き合の存在の確証と云ふ

可なり考へてもよい。何れにしても

口説き合の存在の基礎を以て

いふことは、  
得る。口説き合の活動の成立を以

て、  
強弱を以て不安定不安定と云ふのは、

得る。口説き合の活動の成立を以

て、  
得る。口説き合の活動の成立を以

て、  
得る。口説き合の活動の成立を以

讀子子京公書。